

クザーヌス研究史に対する一考察 —思想史研究・一性研究に注目して—

徳田 安津樹

本稿では 15 世紀ドイツの神秘主義的哲学者・神学者であるニコラウス・クザーヌス (1401-1464) に関する研究史を広い視点から整理し、現代のクザーヌス研究にどのような視点が求められているのかを検討する。モーゼル河畔クースに生まれたクザーヌスは、教会法学者として出発し東西両教会の一致に尽力した後、枢機卿や司教として教会・修道院改革に奔走し、キリスト教・ユダヤ教・イスラームの調停をも唱えたとともに、どの修道院・学派にも属することなく哲学・神学を研究して独自の思想を唱え、また写本蒐集家として人文主義者に名を馳せながら、数学・自然学についての論考も著すなど、多種多様な場面で目覚ましい働きをした人物として知られている。しかしながら最も特筆すべきことは、多面的な思想や活動が彼においてただ並立しているのではなく、一つの形而上学的考察によって全て調和的に統一されているということである。中世と近代の狭間において、終生実践活動を精力的に続けながらも、独自の形而上学的体系を構築した、哲学史上において非常に稀有な存在であると言えるだろう⁽¹⁾。

このような人物的な魅力から、死後もその思想は（表面的な影響関係は見えにくいものの）脈々と受け継がれた⁽²⁾。18 世紀にドイツにおいて、とりわけ啓蒙主義劇作家レッシングによって見出されて以降は学問的対象としての地位を高め、1920 年には E. ヴァンステンベルグによって浩瀚な伝記⁽³⁾が刊行されるに至る。1930 年代以降になるとハイデルベルク学術アカデミーから『クザーヌス全集』(Nicolai de Cusa opera omnia, 1932~) が順次刊行され、ドイツ語をはじめとした近代語への翻訳も充実し、また 70 年代には『全集』に膨大な説教集が加えられるとともに、包括的な文書記録である『クザーヌス関係記録文書集成』(Acta Cusana: Quellen zur Lebensgeschichte des Nikolaus Von Kues, 1976~) も刊行され始め、クザーヌスに関する歴史資料は増大の一途をたどっている。また 1960 年にはドイツの「クザーヌス学会」、1981 年には「アメリカ・クザーヌス学会」、1982 年には「日本クザーヌス学会」が発足し、それぞれが盛んにシンポジウムや機関誌を開催、刊行してきたこともあって、クザーヌスに関する研究もまた膨大に積み上げられ、その内容も、クザーヌス自身の多面性のために、思想史や哲学史だけでなく、神秘主義、宗教と政治、宗教平和・宗教寛容など多彩を極めている。

これらの研究を全て検討することはもとよりできない。しかしながら本稿では、特に思想面

に限定し、代表的な研究者に目を配りながら、その大まかな研究動向を把握することによって、現在でも有効と考える研究の視点を導き出したい。

1. 思想史・哲学的意義

研究の膨大な蓄積にもかかわらず、クザーヌスの思想的意義となると、「中世と近代（近世）の境界に位置し、何らかの意味で先駆的な思想を展開した人物である」という共通理解が得られてはいるものの、「いかなる意味でそうであるのか」という問題に対しては、大まかな傾向を除いては未だ一致した見解が示されていないと言ってよい⁽⁴⁾。これにはクザーヌスが直接的に影響を与えた人物が少なく、またそもそも影響を与えたことの証明自体が困難であるということなどがその理由として挙げられよう。とは言えクザーヌス研究の発展は、クザーヌスそのものに対する関心というより、近代という歴史的位相をそれ以前の時代から捉えようとする哲学的探究において、両時代の結節点としてクザーヌスが見出されたことに支えられてきた。そのため今日流通しているクザーヌス像は、基本的にはそのような視点からクザーヌスに接近した哲学史家たちによって構築されたものであると言っても過言ではない。従って、まずはそのような思想的視点からクザーヌスに取り組み、クザーヌスの名を世に知らしめた研究者を数名紹介して、彼の思惟の何が論点となったのかを概観していくとともに、このような視点からの研究の現状について検討したい。

クザーヌスに近代的精神の先駆性を見出した研究者としては、『全集』の編者を務め戦後の文献批評研究の担い手であった E. ホフマンと R. クリバンスキーを第一に挙げるべきではあるが、ここでは後世への影響力が強く、またクザーヌス像を固めた人物として、E. カッシーラーを取り上げたい。彼は『認識問題』(*Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, 1906~1920)において、「実体的思考」から「関係性の思考」への転換を、近代哲学史、とりわけルネサンス哲学からカントに至る流れのうちに追跡するという独自の哲学史観を構築しているが、その中でクザーヌスを、依然中世的な枠組みの内にあるものの、近代的な考え方に通じる思想を展開した人物として捉えている。すなわちクザーヌスの思惟は「無限と有限は比較できない」という根本命題から出発し、その発展の中で「神的存在をその混じりけのない純粋な形で把握しようとする努力と並んで、個別的存在者をその固有の価値において捉え、その有限な特殊性において確保しようとする傾向がはっきりと現れてくる」⁽⁵⁾という意味において、ルネサンス哲学の模範にして起源である。有限なる人間はいかなる方法によっても無限なる神を把握することができず、その意味で人間的経験や概念は決定的な制限を受けているが、しかしながらこの認識能力の欠如は、問題の中心を認識の対象から働きへと移すことによって経験的探究を視野に収め、かえって精神を自己肯定することになる（すなわち「知ある無知」）⁽⁶⁾。ところでこのような精神は、現象世界の彼方にある絶対的存在たるアイデアを拒絶するために、事物の本質を捉えられずその間接的な「類似」しか獲得しえないという難題を抱えるが、クザーヌスはここからさらに前進して、むしろ対象の把握は人間精神の本質の類似に基づいてなされるという立場に立つ。すなわち精神は対象を模写するのではなく、自分自身の中に（「精神の内なる円」）が一切の偶然性を斥けて厳密な純粋性・必然性

を有するように) 数学的な確実さ・精確さを見出し、それを基盤・尺度として対象を認識するのである。このとき精神は神の似姿たる一性として感覚的世界を包み込むのであり、この意味で精神は「あらゆる経験的存在の原型にして模範になる」⁽⁷⁾。神的な一性はもはや抽象的な孤立においてではなく、その展開たる事物の多性を契機として精神がより高次の一性へと高められるという仕方で把握される⁽⁸⁾。クザーヌスの思惟の焦点は今や経験的世界から精神へと移り、主観性を担う精神は単なる絶対的存在の対極としてではなく、それを類比という仕方で考察する力を持つものとして解釈される。すなわち人間の精神はその働きそのもの、根源的な認識力において神の似姿であり、神があらゆる事物の存在の創造者であるように、人間の精神はあらゆる概念、ひいては価値の製作者である。ここにおいて歴史の発展は中世的な超越的存在者ではなく人間精神の内在的内容が牽引することとなり、クザーヌスの思惟が近代の哲学の出発点として結実していることが明らかになる⁽⁹⁾。『個と宇宙—ルネサンス精神史—』(*Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance*, 1927) では、クザーヌスをルネサンス期の思想的全体像の把握のための出発点たるべき存在として、すなわち「その時代の根本問題の全体を一つの方法論的原理から把握し、かつこの原理に基づいてこれを統御している唯一の思想家」⁽¹⁰⁾として考察し、近代の先駆者という視点を保持している。すなわち彼の思惟が「有限と無限は比較することができない」という原理から出発し、神に対して宇宙像からでなく認識論から接近したこと、つまり「彼の第一歩が、神を問うことよりも、むしろ神を知ることの可能性を問うことに向けられている」⁽¹¹⁾ということにおいて、クザーヌスを「最初の近代的思想家」⁽¹²⁾と評している。しかしながら本著では『認識問題』の議論の枠組みに加えて、クザーヌスにおける近代性がとりわけ中世の宗教的な前提、神秘主義的な動機から出発していることが強調される。神へと直接的・全一的に関わる知的直視 *visio intellectualis* は、「知ある無知」によれば絶対性は神のみに帰せられ、世界においてはいかなる中心・周辺・ヒエラルキーも認められないのだから) 神がいかなる事物に対しても同一の距離を有するとともに、個々の特殊性は担保されるという形で、成立しなければならない。つまり神の一なる眼差しは個別的なものを個別的なままで全てを見渡すという、多様性・対立性を含めた全体性によってのみ捉えることができるのである。カッシーラーはこの思惟においてルネサンスの根本精神である個人という問題の深化が見られるとする。すなわち、経験的多性の中に真理が顕れているという立場によって、神学的・神秘的思想に基づきながら「自然と人間を発見」することに成功したのであり(神の書物・聖なるしるしとしての自然)、ここには客観的観察の目覚めと主観性の深化がなされている⁽¹³⁾。ところで、ここに見られるある種世俗的な人間性は、キリストという理念によって容認される。つまり飛び越えることのできない深淵を間に有する神と被造物を媒介する存在として、すなわち個々の特殊的存在としての人間ではなく普遍的な人間性そのものとしてキリストを導入することによって、そのキリストと同じ本質(人間的精神ないし人間性)を有する人間が、すべての事物をその内に包含し、真に創造的な活動の中心点として要求される⁽¹⁴⁾。こうして、『認識問題』でも見られたような、概念の製作者という主体としての人間精神が提出されるのである。

クザーヌスの先駆性の指摘はその認識論だけでなく、宇宙論によるものも多い。その代表が

A. コイレの『コスモスの崩壊 —閉ざされた宇宙から無限の宇宙へ—』(*From the Closed World to the Infinite Universe*, 1957) である。コイレによれば、16・17世紀におけるヨーロッパ人の精神の深刻な変化の原因である科学思想と哲学思想の根本的革命は、価値の階梯がそのまま存在の階梯となる「有限で閉ざされた、階層秩序を持つ全体としての世界」という考え方が無効となって、代わりに法則の同一性に基礎づけられる無際限の宇宙、ひいては無限の宇宙が登場したということ、すなわち「コスモスの崩壊と宇宙の無限化」によって特徴づけられる⁽¹⁵⁾。その中でコイレはクザーヌスを「中世的なコスモス概念を初めて斥け、宇宙の無限を主張したという功績ないし罪過を往々にして帰せられる」⁽¹⁶⁾ 哲学者として取り上げる。まず彼の形而上学的・認識論的な根本概念である「知ある無知」によれば、宇宙においては「最大」も「最小」もありえず、「より大きい」か「より小さい」しかありえないため、宇宙において静止はありえないことになる。というのも、宇宙において「より速い」「より遅い」を超えた「無限に速い」「無限に遅い=静止」はありえず、ありうるとすれば「無限に速い」「無限に遅い」が一致する神においてのみだからである。従って、運動が静止する宇宙の中心は神において周と一致するため、宇宙自体は中心も周も持たないのだから、宇宙を有限なものとして捉えることはできない⁽¹⁷⁾。同様にクザーヌスは宇宙における厳密性・一義性を否定して宇宙の階層構造を斥け、地球の相対的な完全性を主張する⁽¹⁸⁾。以上のような意味において、クザーヌスの思惟は中世的な宇宙像から脱していると言える。但しコイレは、クザーヌスにとって宇宙は無限 *infinitum* ではなく（神のみが無限であるため）あくまで無限定 *interminatum* であることや、なお天球の存在を前提していたことなどを挙げ、彼の宇宙は近代人が言うところの無限の宇宙とは異なっており、コペルニクスの先駆者とは言えない、と注意喚起している⁽¹⁹⁾。

また中世から近代への移行という視座の中でクザーヌスを位置づけた研究者として H. ブルーメンベルクが知られている。彼によれば、クザーヌスは中世的体系に属しながらも近代の萌芽をその内に有する人物であり、その思惟の体系は、キリスト教神学に内在する神中心性と人間中心性の厳しい対立という中世的世界の存続の危機に対する憂慮と、それに対する解答の試み、すなわち「人間中心性と神中心性という、ともに正当なものともみなされる神学的な根本的動機を、それ自身において保持可能な一つの構造体の内にあえて二つながらに繋ぎ止め」⁽²⁰⁾ するという、中世の精神それ自体に基づいた中世的世界像の救出の試みとして理解されなければならない。そのためにクザーヌスは、一方で神の超越という契機を強化しながら、他方では人間と宇宙という内在が無効とならないようにする。それがすなわち「知ある無知」であり、クザーヌスはこの思惟によってスコラ的な超越に対する肯定的述語づけに伴うジレンマからも、神秘主義的な否定による知性の停止からも区別され、否定に基づく認識の拡張を成し遂げる。つまり「知ある無知」からは人間の認識は厳密に真理を把握しえないという「非厳密性」の原理が導かれ、我々が何を知らないか、知りえないかを知るという近代的学問知の出発点と結び付くのである⁽²¹⁾。ところでブルーメンベルクによれば、クザーヌスの思惟は超越を強化しながらも内在を無効化しない体系を有するが、しかしながらただ両者を分断したのではなく、そこにキリストの受肉という論理を持ち込むことによって超越と内在を繋ぎ止めようと試みていた。このことはジョルダノー・ブルーノが無限の宇宙そのものが神性の現れであるとし、また

受肉の論理を斥けることで、無限と有限の差異を全く無に帰して中世の世界像を葬り去ったことに比べるならば、クザールヌスが未だ中世の世界の中に存在していたということの証明となる⁽²²⁾。ブルーメンベルクは中世的体系の内に近代哲学の起源を見出すことで中世と近代の断絶と連続を描き出そうとしたわけであるが、近代科学的精神の契機として（カッシーラーが数学的な精確さの要求を挙げたのに対し）「非厳密性」の許容を指摘したこと、また認識論でなく世界の体系的秩序の変遷から中世から近代への移行を考察したことは特徴的である。

なお日本において戦後本格化したクザールヌス研究は、西田幾多郎のクザールヌスに対する一貫した関心によって動機付けられたものとは言えるだろうが⁽²³⁾、より学問的な研究の動機を与えたのは（戦前の日本における新カント派哲学の隆盛もあって）カッシーラーによるクザールヌスの歴史的な位置づけである。山田桂三、清水富雄、菌田坦ら京都学派系の研究者はクザールヌスの哲学史的意義という問題から論考を出しており、中でも菌田はこのような議論に格別の関心を寄せていた。『〈無限〉の思惟』（1987）において、菌田はクザールヌスにおける中世的な神秘主義的側面と近世的な科学的側面を調和的・体系的に存立せしめている根本的な哲学的思惟から、クザールヌスの思想それ自体の全体像の理解を目指している。そしてそのような根本的立脚点を「〈docta ignorantia〉の立場」、またそれに基づいて展開される彼の思惟の全体を「〈無限〉の思惟」（無限と有限の徹底的な断絶を前提とした、無限についての思惟にして無限に進行する思惟）と特徴づけた上で⁽²⁴⁾、クザールヌスの思惟における近世的精神の先駆性として宇宙論と人間論を指摘する。しかしながら菌田は本著において、クザールヌスの思惟に意義を求めるとすれば、単に中世的精神から近世的精神への移行における位置づけという消極的な規定によるのではなく、両者を一つの独自の全体的統一のうちに包み込むるつばのごときものとして、それ自体で積極的・自立的になされるべきとしている⁽²⁵⁾。そのため宇宙論については、確かにスコラの世界像を打破する斬新な知見を有しているものの、それは彼の形而上学的思惟の帰結に過ぎず、科学的な認識・方法に基づくものではないため、先駆性は強調され過ぎてはならず、むしろそこから科学的思考が可能になるような地盤形成に関係しうる彼の思惟原理の独自性が評価されるべきであるとする⁽²⁶⁾。またクザールヌスの思惟の全体が収斂するとしている人間論、とりわけ認識論については、人間精神の認識活動は神の〈写し〉として活動する（神の根源的活動たる世界創造の写しとしての人間精神の認識活動）のであって、クザールヌスにおける人間精神は一方では対象認識を通じての認識主体の自己実現という後の近世の主体性・近世的認識主観の原型を看取することができるが、他方ではそのような世界認識を通じての精神の自己認識は最終的には神認識にまで昇華されるという信仰に基づく多分に神秘主義的な側面も有し、そうした二方向への認識こそ精神の全体的活動であるとしている⁽²⁷⁾。なお菌田は、論文集『クザールヌスと近世哲学』（2003）においては、（クザールヌスによる直接的な影響を見ることはしないが）クザールヌス以後形成・発展していく近世哲学の視座から彼の思想を捉えなおすという、クザールヌスの先駆性をやや強調する立場へと移行している⁽²⁸⁾。

一方で、以上のようなクザールヌスを近代哲学の先駆とする解釈に対して、J. ホプキンスは文献学的により精確な研究によって批判を加えている。彼は従来のクザールヌスの近代性を主張する議論の中心が彼の認識論に置かれていることを確認し、近代的認識論をカントに代表させ

た上で、クザーヌスの認識論はカントのそれとは異なるとする⁽²⁹⁾。例えば、クザーヌスは一見「理性的魂が存在しないならば、時間は存在しえない」と主張しているように見えるが、文献を正しく読み解くならば、彼の主張において人間の精神が与えるのは持続を測定する尺度に過ぎず、また神の精神による把握の下で時間は存在するため、時間が人間の精神のみに依存することはない、ということが分かる。同様に、クザーヌスにおいては空間が精神の形式であるようなことはないし、カテゴリーも人間の精神とは無関係に神の精神の下で実在している⁽³⁰⁾。また数学的な厳密さは、数学にのみ要求されることであって、経験的概念は不正確なままである⁽³¹⁾。ホプキンスはこのような読み違えの原因として *ratio* や *mens* といった基本的概念の誤読を指摘した上で、クザーヌスの認識論は全くカント的ではないとし、そのためクザーヌスを近代の先駆者と見なすことは不可能であるとしている。

とは言え、ホプキンスの議論はクザーヌスが中世と近代の中間的位置に立っていることを否定しているのではない。彼によればクザーヌスはスピノザやカントやヘーゲルのような近代思想家と称せられるほど中世的枠組みを脱してはいないが、示唆的ではあり、知ある無知、有限と無限の比較不可能性、神における反対の一致、地球の動性、地球の欠如的無限性という彼の五つの概念は中世よりも近代に共鳴する（それゆえクザーヌスの歴史的役割について「近代への扉を開けたが、彼自身が中世と近代を分ける閾を飛び越えたことはない」と評するのが適切であるとしている⁽³²⁾）。ホプキンスの意図がクザーヌスの過渡的性格を否定することではなく、カッシーラー以降の誇大な物語に基づく粗雑な研究を牽制して、クザーヌスそれ自体を理解するためにミクロな視点で思想家間の影響関係や概念の変遷の緻密な検討を推奨することにあるということは、留意されるべきである。

以上の議論を踏まえて研究の現状を検討してみよう。従来クザーヌスの思惟に大きな意義を見出すことで研究を牽引してきた、クザーヌスにおける近代の先駆性を強調する議論は、ホプキンスの主張によって、一見して道を閉ざしているように見える。実際、近年においてクザーヌスの思惟に何らか意義を求めようとする研究の多くは、思想的な位置づけではなく、それを困難にしている元凶たるクザーヌス自身の境界性をむしろ普遍性として積極的に受け取り、その現代的意義を問うものである（その典型が2002年に開催された「東京・クザーヌス国際会議」の成果が収められた八巻和彦・矢内義顕編『境界に立つクザーヌス』（2002）である）。そして当の思想史研究については、ホプキンスの意図通り、中世・近代といった巨大な枠組みを判断停止して、ミクロな視点からクザーヌス自体の理解に寄与する論考が求められていると言える。そのため冒頭で触れた『クザーヌス関係記録文書集成』や、クザーヌスに関係する、あるいは彼に影響を与えたとされる多種多様な思想・人物・場所について解説した『ニコラウス・クザーヌス ―彼の人生と時代への手引き―』（*Nicholas of Cusa: A Companion to his Life and his Times*, 2011）、そしてアメリカ・クザーヌス学会の会長も務め教会法学者・教会政治家としてのクザーヌスを位置づけた渡邊守道の諸研究⁽³³⁾など、歴史的事実の詳細な記録資料がクザーヌス研究においてますます重要となっている。また近年クザーヌス学会による叢書から、「言表不可能性 *ineffabilis*」「生命ある像 *viva imago*」などのテーマごとにクザーヌスの思想を追跡する論考が次々と刊行されている⁽³⁴⁾。また先に挙げた『境界に立つクザーヌス』の「ま

えがき」には、この表題は「中世と近代との〈境界〉」という視点からの検討も意味するとあるが⁽³⁵⁾、実際にはカッシーラーやブルーメンベルクのような哲学史観からはかなり距離を取っていて、やはりクザーヌス自体の理解を目指すものが目立つ。

しかしながらクザーヌスを思想史的・哲学的に位置づける試みが全く不可能になったわけではない。ホプキンスが主張しているのは、先にも述べたように、あくまでもクザーヌスの認識論は近代的（カント的）ではないということであって、決してクザーヌスの思惟が中間的位置を占めていることを否定したわけではない。従って、カッシーラーはともかく（実際にはカッシーラーも『認識問題』ではクザーヌスの出発点がやはり神学であることから彼を近代哲学の創始者・先駆者と見做すことに反対しているのだが⁽³⁶⁾）、クザーヌスの先駆性を宇宙論に見たコイレや、中世的思想の中から近代の萌芽が生じる過程の考察のためにクザーヌスを取り上げたブルーメンベルクの議論はなお再考に値する（そのため中世と近代の境界という視点に基づくクザーヌス論は近年においても見られる⁽³⁷⁾）。もちろん、大きな枠組みの中でクザーヌスを位置づける試みは今や無謀に近い。しかし、概念の変遷を追跡する精緻な研究の蓄積によって、歴史的意義の探求の道は未だ開きうる。逆に言えば、そもそもクザーヌスの後の思想家への影響の証明の困難さが歴史的な位置づけを厄介にしている以上、このようなミクロな視点に基づく研究なしに、思想史研究の打開は望めない。

ではクザーヌスそれ自体を理解するための影響関係や概念の歴史家的研究が求められている現在、その中でいかなる分野がクザーヌス研究により寄与しうるか。次章ではクザーヌス思想研究の中核を担っていた「一性 *unitas*」研究を簡潔に顧みながら、検討したい。

2. 「一性 *unitas*」に関する研究

J. コッホの『ニコラウス・クザーヌスの推測術』（*Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kues*, 1956）によれば、クザーヌスにおける最初の哲学的著作『知ある無知について』（*De docta ignorantia*）とその姉妹編とされる『推測について』（*De coniecturis*）では、問題としている対象が異なるのではなく、むしろ根本的な問題の枠組みそのものが変更されている⁽³⁸⁾。『知ある無知』は、創造の過程が人間には全く把握不可能であることを前提しており、これはアリストテレス・トマス的な「存在形而上学 *Seinsmetaphysik*」の立場、すなわち「我々自身が属する存在者から出発し、（存在者、一者、真実、善などの）類比的な概念を用いて存在そのもの、すなわち神へと上昇せん」⁽³⁹⁾とする「下からの形而上学 *Metaphysik von unten*」である。しかしながら『推測』においては偽ディオニュシオス的な「一性形而上学 *Einheitsmetaphysik*」、すなわち「第一の所与としての絶対的一性から出発し、そこから世界の理解へと下降する」⁽⁴⁰⁾「上からの形而上学 *Metaphysik von oben*」へと立場が転換しているのである。実際『推測』の中では、一性（原理としての神的性質）—他性（被造的性質）という概念枠組みから出発し、絶対的一性としての神・知能・魂・身体という四つの一性とそれに対応する認識領域、そして分有 *participatio* という概念によって諸事物の成立を説明しているのである⁽⁴¹⁾。そして『推測』以降のクザーヌスはこの「一性形而上学」を思考の基本的枠組みとしている。なお現在ではこ

の「一性形而上学」の枠組み自体は必ずしも全面的に受け入れられてはいないが、クザーヌスの思惟の核心の一つが一性であること、またクザーヌスの思想全体を把握するためには『知ある無知』だけでは不十分であり、後の著作から思惟の発展を読み解かなければならないということを知らしめた研究とされている。

K. フラッシュは『ニコラウス・クザーヌス 一歴史と発展一』(Nikolaus von Kues. *Geschichte einer Entwicklung*, 1998)において、クザーヌスの思惟に「一の多に対する優越」が生涯一貫して存在することから、彼の哲学はその本質において一性の哲学であるとしている。そしてクザーヌスの哲学を時系列で追いつながりながら発生論的に捉えるという指針に基づいて考察を進めており、そのため基本的にはコッホの枠組みを認めながらも、『知ある無知』と『推測』の差異をむしろ一性の哲学の方法論たる「反対の一致 *coincidentia oppositorum*」の発展として捉えている⁽⁴²⁾。またフラッシュによればこの「反対の一致」は神秘主義的に、あるいはキリスト教の信仰に基づいたものとして捉えてはならず、またクザーヌスにおける種々の神学的議論は聖書や教会の権威ではなく「一」に関する哲学的洞察の発展として理解されなければならない⁽⁴³⁾。このことを踏まえてクザーヌスの思惟を辿るならば、その発展は以下の五つの段階を踏んでいる。すなわち 1430 年頃には様々な哲学的動機が不調和に並列していたが、1440 年の『知ある無知』の段階となると一致の思惟の下に思想が体系化され、その中で世界における対立や人間的認識に先立つ超越が強化されることにより、知の困難さ、すなわち闇が優位を占めるようになる。しかし『推測』の段階になると、知の闇という基本的立場が転換されて、人間の知性の地位が高められるようになる。1450 年頃には神の一性が世界において自己を現すという思惟に達して、技術や日常や自然探究への関心を強め、そして最晩年には思想的諸条件をラディカルに切り落として「可能自体」の哲学へと純化する⁽⁴⁴⁾。ここに至っては、真理は人間的知の到達しえない闇ではなく、いかなる知においても前提されるものとして、最も単純にして最も到達可能なものとなる⁽⁴⁵⁾。

また近年の研究の中で、クザーヌスにおける「一性」について新しい視点を与えてくれるものとして、八巻和彦の『クザーヌスの世界像』(2001)を挙げることができる。彼はクザーヌスの思惟の特徴を「合致」や「協和」にあるとし、それを成立せしめる生涯に渡る動機を、「一であるはずの神から創造された被造物がなぜ多種多様な存在としてありえているのか」という「〈多様性〉問題」にあると見る⁽⁴⁶⁾。八巻によれば、クザーヌスは初期においては先の問いに対する解答を〈反対対立の合致 *coincidentia oppositorum*〉を媒介として論理的に説明しきることを目的としていたが、中期に至って論証の継続を取り止めている。すなわち被造物の多様性を、謎としてではなく、神がしつらえた、人間の精神が神の認識へと至るための構造として肯定的に捉え、世界の側からの神の探究は神の意志に適うと考えるようになったのである⁽⁴⁷⁾。また八巻は視点を一步引いてクザーヌスの思考そのものに着目し、そこには自らの立脚点を掘り崩して絶えず自己相対化を図り新たな真理探究へと前進する脱中心的な構造が見られるとする。そして〈包含 *complicatio* - 展開 *explicatio*〉といった、一つの立場を〈極〉として把握すると必然的にそれに対立するものとしてもう一つの〈極〉を想定するという「〈思考の二極性〉」を指摘して、最終的にはクザーヌスの思惟の根本構造を、二つの〈極〉が〈協和

concordantia) に向かって進み行く〈楕円の思考〉と特徴づける⁽⁴⁸⁾。さらに思考構造としてだけでなく、クザーヌスは世界の存在論的あり方も〈楕円の〉、つまり「〈多様性〉から〈協和〉へ」と向かっているものとして理解していると結論づけている⁽⁴⁹⁾。八巻の議論においては、クザーヌスの思惟における「一性」が根拠としてではなく、むしろ問いとして現れており、それに対する解答として生涯の思索が位置づけられているために、「一性」に固執することなくクザーヌスの思想全体における「一性」の位置が描き出されている点で、注目に値する。なお本著はクザーヌスの思惟それ自体を明らかにすることを目的としており、哲学史における位置づけにはほとんど触れていないということにも言及しておく⁽⁵⁰⁾。

なお以上の他に重要なものとして、プラトン主義、あるいは新プラトン主義の伝統においてクザーヌスの一性概念の位置づけを試みる研究も多数存在し、中でも W. バイアーヴァルテスが代表的である。彼はとりわけシャルトル学派からの三位一体論の影響などに着目しつつ、「一者 unum」であるとともに「同一者 idem」でもあるクザーヌスの神概念の発展を追跡している⁽⁵¹⁾。また日本の研究者では佐藤直子が代表的である⁽⁵²⁾。

さて以上クザーヌスの「一性」に関する研究を見た上で明らかに指摘しうることは、神学からの視点がほとんど欠如している、ということである。確かにクザーヌスは自身の思索と活動の全体を一つの形而上学的体系から統一的にまとめあげたということは認めうる。しかしながらそのような行為がキリスト教的信仰から離れて行われたということが果たしてありうるだろうか。クザーヌスに対する批判的な研究書である『ニコラウス・クザーヌス』において、ヤスパースがクザーヌスの思惟は教会的啓示信仰と哲学的知性という二重の方法で理性を超えていると述べている⁽⁵³⁾ことからしても、クザーヌスにおける哲学と神学は、一方が他方に依拠するというのみが認められてはならない。従って、クザーヌスの思想体系、とりわけその中核たる「一性」に対する理解を更新するためには、神学という視点からの研究が求められねばならないと言えるだろう。ところで、クザーヌスの思惟の中核に関わり、彼の「一性」がそれから切り離して考えることができないとされる神学的議論は、三位一体論とキリスト論である。最後にこれらの研究現状について簡単に触れておこう。

3. 神学研究

クザーヌスの思惟において三位一体論・キリスト論が特に重要であるという指摘は、とりわけ神秘主義研究の立場からなされている。しばしば言われるように、クザーヌスの神秘主義は愛による神との神秘的合一ではなく、知性による神の探究が中心的な位置を占めている（このことについて八巻は、神探究の最後の段階においても人間の知性が働いていること、神による人間の一時的な奪い上げ raptus は人間が神を無限として認識する時に成立すること、神の直視には愛以前に知性の働きが不可欠であることなどを指摘した上で、クザーヌスの神秘主義を神の圧倒的な明るさに歩み入る「明るい神秘主義」であると表現している⁽⁵⁴⁾）。そしてそのような神の探究においては、キリストが不可欠な媒介として働くことが指摘されている。神秘主義研究の大家である B. マッギンは、神秘主義の核心を「神の現れ presence of God」に見、その視点から長大なキリスト教神秘主義の歴史の叙述を試みるシリーズ本『神の現れ —西洋

キリスト教神秘主義の歴史一』(『*The Presence of God: A History of Western Christian Mysticism*, 1991～)の第四巻の最後に、巻全体の文脈からやや離れて、すなわち情的な脱自の自叙的説明でなくとりわけ知性による観想の神秘主義として、(神秘神学と中世末期の神秘主義への寄与に限定してではあるが)クザーヌスの位置づけを試みている⁽⁵⁵⁾。マッギンによれば、クザーヌスの神秘神学の中心は「神を見る」神秘主義であり、その目的である「不可視の神を見る」という事態は、イエス・キリストにおいて我々にあきらかにされることの三位一体の愛である神を見ることによるのみ可能となる。すなわちクザーヌスの神秘神学は本質的に三位一体論的、そしてキリスト論的であって、彼の神秘主義を考える上で三位一体論とキリスト論を欠かすことはできないのである⁽⁵⁶⁾。

このような重要性にもかかわらず、クザーヌスにおける三位一体論・キリスト論はないがしるにされ続けてきた。まず三位一体論については、R. ハウプストによる古典的研究『ニコラウス・クザーヌスによる世界における一のかつ三の神の像』(『*Das Bild des Einen und Dreieinen Gottes in der Welt nach Nikolaus von Kues*, 1952)を除いては、クザーヌスの三位一体論の体系的理解はほとんどなされてこなかった。しかし近年になってA. ガーノーチ『三一的創造者 —三位一体の神学と共働—』(『*Der dreieinige Schöpfer: Trinitätstheologie und Synergie*, 2001)の第五章において創造との関係性から三位一体論が展開されるなど、注目を集めつつある。また2014年にF. レッシュがクザーヌスの三位一体論をほぼ生涯を通して整理しており、これからの研究において重要な役割を果たすと考えられる。またキリスト論についての体系的論考は、三位一体論よりもさらに少ない。ハウプストの古典的研究『ニコラウス・クザーヌスのキリスト論』(『*Die Christologie des Nikolaus von Kues*, 1956)の他にはS. シュナイダー(1976)による研究⁽⁵⁷⁾が触れられる程度である。

念のため述べておくが、このような研究の少なさは、決して重要度の低さを意味しない。それは従来クザーヌス研究を牽引してきたクザーヌスに近代的精神の先駆性を認める哲學家たちが、その先駆性を彼の宇宙論に限定しない限りでは、いずれもキリスト論に触れざるを得なかったことからしても明らかである。また神学系の研究者、背景にキリスト教を抱えている研究者は、クザーヌスの思惟の真髄を、やはりキリスト論に見出すのである。すなわち、三位一体論・キリスト論という視点から出発した体系的記述となると非常に数が限られる、ということに過ぎないのである。従って、中世・近代という大きな枠組みにとらわれることなく、影響関係や概念史の緻密な検討が求められる今日のクザーヌス研究においては、当時起きていた神学的議論や彼に影響を与えたとされる神学者の思想などを踏まえながら、「一性」を核とするクザーヌスの思想を照らし出し、その全体像を再構成して行く試みが、一つ有意義な議論として挙げる事が可能であるだろう。

註

(1) 彼の人生については、E. モイテンの『ニコラウス・クザーヌス』(『*Nikolaus von Kues*

- 1401-1464: *Skizze einer Biographie*, 1964) が標準とされている。また最近翻訳された K. フラッシュの『ニコラウス・クザーヌスとその時代』(*Nikolaus von Kues in seiner Zeit*, 2004) にも簡潔にまとめられている。
- (2) Stephan Meier-Oeser, *Die Präsenz des Vergessenen: zur Rezeption der Philosophie des Nicolaus Cusanus vom 15. bis zum 18. Jahrhundert* (Münster, Aschendorff, 1989).
 - (3) Edmond Vansteenbergh, *Le Cardinal Nicolas de Cues (1401-1464): L'action – la pensée* (Paris, Champion, 1920).
 - (4) 例えば、現在の中世哲学史の標準と見なされているアラン・ド・リベラの『中世哲学史』では、クザーヌスは終章においてほとんど付け足しのように言及されており、15 世紀を「宗教会議の時代でもあった」と特徴づけた上で彼を「最後の中世人であると同時に最初のルネサンス人であった」と評しているが、いかなる意味で「中世人」であり「ルネサンス人」であったのかという説明まで踏み込んではいない。また K. リーゼンフーバーは『中世思想史』の十九章「中世末期の知的状況」の末尾にクザーヌスを取り上げており、「全貌の掴みがたいその多面的な活動は、中世的であると同時に、人文主義と初期ルネサンスを代表し、近代的精神の成立を先取りするような意味をもっている」と述べているが、やはりいかなる意味で「近代的精神を先取り」したかまでは触れられておらず、また「第IV部 近世への移行」にはクザーヌスへの言及自体がない。中央公論新社によるシリーズ本『哲学の歴史』には第四巻「ルネサンス 15-16 世紀」(伊藤博明編, 2007 年)に記載されているものの、その意義については、伊藤博明による「総論」にはルネサンス哲学の典型であるミクロコスモスとしての人間論の一例として(41 頁)、八巻和彦による「ニコラウス・クザーヌス」の章には「人間の知的探求は、既知なるものをもとにして未知なるものを推し量ることによって成立する」(139 頁)、「〈質〉の違いを〈量〉(重さ)の多少によって説明しようとする」(139 頁)という特徴をもって、「近代の自然哲学的思考の先駆とされることもある」(139 頁)と記述される程度である。しかもそのようにクザーヌスを評した人物としてカッシーラーを挙げているが、カッシーラー全体の論旨からすればややずれている。さらにより細かい位置付け、具体的には唯名論者・実在論者という分類についても、おおまかには(多くは、唯名論によってスコラ哲学がそのままでは立ち行かなくなった現状を決して無視しなかった、という意味で)唯名論者として捉えられているように思われるが、例えば坂部恵は『ヨーロッパ精神史入門』(1997 年)の中で、唯名論と実在論の区別をバースに基づいて「個を限定された (definite) ものと見るか、それとも汲み尽くしがたく非限定的 (indefinite) なものと見るか」(70 頁)という対立から捉えた上で、クザーヌスを実在論の系譜に置いている(116-123 頁)。
 - (5) Ernst Cassirer, *Text und Anmerkungen* bearbeitet von Tobias Berben, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der Neueren Zeit Erster Band* (Hamburg, F. Meiner, 1999), S. 19. 須田朗・宮武昭・村岡晋一『認識問題 —近代の哲学と科学における— 1』(みすず書房, 2010 年), 21 頁。なお以降引用を行う際、翻訳書がある場合はその訳に従う。

- (6) *ibid.* S. 20-24. 同訳, 22-25 頁。
- (7) *ibid.* S. 30. 同訳, 30 頁。
- (8) *ibid.* S. 28-34. 同訳, 28-33 頁。
- (9) *ibid.* S. 45-50. 同訳, 43-48 頁。
- (10) Ernst Cassirer, Text und Anmerkungen bearbeitet von Friederike Plaga und Claus Rosenkranz, *Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance; Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge* (Hamburg, F. Meiner, 2002), S. 8. 藪田坦訳『個と宇宙—ルネサンス精神史—』(名古屋大学出版会, 1991年), 9頁。
- (11) *ibid.* S. 11. 同訳, 13頁。
- (12) *ibid.*
- (13) *ibid.* S. 35-44. 同訳, 39-47頁。
- (14) *ibid.* S. 44-47. 同訳, 49-52頁。
- (15) Alexandre Koyré, *From the Closed World to the Infinite Universe* (Baltimore, Johns Hopkins Press, 1957), p. 2. 野沢協訳『コスモスの崩壊—閉ざされた世界から無限の宇宙へ—』(白水社, 1999年), 15頁。
- (16) *ibid.* p. 6. 同訳, 18頁。
- (17) *ibid.* pp. 9-12. 同訳, 20-23頁。
- (18) *ibid.* pp. 16-23. 同訳, 27-34頁。
- (19) *ibid.* pp. 6-8. 同訳, 18-19頁。
- (20) Hans Blumenberg, *Aspekte der Epochenschwelle: Cusaner und Nolaner* (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1976), S. 35. 村井則夫訳『時代転換の局面』(法政大学出版局, 2002年), 42頁。
- (21) *ibid.* S. 36-53. 同訳, 43-66頁。
- (22) *ibid.* S. 103-111. 同訳, 129-140頁。
- (23) 西田哲学におけるクザーヌスに関しては、八巻和彦「西田幾多郎におけるクザーヌスとの出会い」『境界に立つクザーヌス』(知泉書館, 2002年)が簡潔にまとめている。また西田哲学・京都哲学を自覚的に引き受けながら、クザーヌスやエックハルトらを足がかりに独自の思想を展開した人物として、松山康國が知られている。『無底と悪』(国際日本研究所, 1972年)や『風についての省察』(春風社, 2003年)はクザーヌスの思惟の哲学的可能性を提示していると言える。
- (24) 藪田坦『〈無限〉の思惟』(創文社, 1987年), 3-12頁。
- (25) 同書, 8頁。
- (26) 同書, 232-235頁。
- (27) 同書, 272-274頁。
- (28) 藪田坦『クザーヌスと近世哲学』(創文社, 2003年), ii頁。
- (29) Jasper Hopkins, “Nicholas of cusa (1401-1464): First Modern Philosopher?” in

Midwest Studies In Philosophy, Vol. 26, 2002, pp. 13-14.

- (30) *ibid.* pp. 22-26.
- (31) *ibid.* p. 25.
- (32) *ibid.* p. 29.
- (33) Morimichi Watanabe, *The Political Ideas of Nicholas of Cusa: with Special Reference to his De concordantia catholica* (Genève, Droz, 1963), 渡邊守道『ニコラウス・クザーヌス』(聖学院大学出版会, 2000年)など。
- (34) 順に Prasad Joseph Nellivilathekkathil, *Ineffabilis in the Thought of Nicolas of Cusa* (Münster, Aschendorff, 2010), Isabelle Mandrella, *Viva imago: Die praktische Philosophie des Nicolaus Cusanus* (Münster, Aschendorff, 2012)。なおこのような哲学史的意義を保留して緻密な歴史研究を行う潮流は決してホプキンスに始まるものではなく古くから行われていたのであるが、ホプキンスは一つの潮目として挙げることができるし、またこのような詳細な事実認識に基づく文献批評の成果としては、やはりホプキンスの『ニコラウス・クザーヌスの弁証法的神秘主義』(*Nicholas of Cusa's Dialectical Mysticism*, 1985)が挙げられるべきであろう。
- (35) 八巻和彦「まえがき」八巻和彦・矢内義顕編『境界に立つクザーヌス』(知泉書館, 2002年), v頁。
- (36) Cassirer, *Das Erkenntnisproblem*, S. 17. 須田朗・宮武昭・村岡晋一『認識問題1』, 19頁。
- (37) 例えば塩路憲一はクザーヌスにおける「個」の重視に着目して、晩年の神を可能そのもの、すなわち「可能自体」とする思惟に基づくならば、可能自体の現実態である一つ一つの「個」は、「それ自体で宇宙全体を映すものとして、同様の構造を持った他の「個」に対してのことになり」、これは「個」を神の影としてではなく「個」の現象として捉える近代科学への道を開きうるとして、なおクザーヌスの哲学史へと位置づけうる可能性を提示している(「クザーヌスにおける「個」の形而上学について」渡邊二郎監修・哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』昭和堂, 2000年)。
- (38) Josef Koch, *Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kues* (Köln, Westdeutscher Verlag, 1956), S. 15-16.
- (39) *ibid.* S. 23.
- (40) *ibid.*
- (41) *ibid.* S. 18-22.
- (42) Kurt Flasch, *Nikolaus von Kues. Geschichte einer Entwicklung* (Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann GmbH, 1998), S. 143-152。なお島田勝巳はコッホとフラッシュの議論を踏まえて、否定神学という視点から『知ある無知』と『推測』の連続性を考察している。「「推測」と〈否定神学〉」(『天理大学学报』第64巻2号, 2013年)を参照。
- (43) *ibid.* S. 50-57.
- (44) *ibid.* S. 42.

- (45) *ibid.* S. 635.
- (46) 八巻和彦『クザーヌスの世界像』（創文社，2001年），77頁。
- (47) 同書，118-123頁。
- (48) 同書，183-241頁。
- (49) 同書，319-327頁。
- (50) なお八巻は翻訳書『神を観ることについて』（岩波書店，2001）の訳者解説の中で，クザーヌスの〈楢円の思考〉は人間と文化の往来が活発化している現代において，単なる懐疑主義でも，自己目的化した相対主義でもなく，互いの理解と協和を求めるものであるという点において「文明の衝突」を超えうる可能性を秘めているものであるとし，今後のクザーヌス研究の展望の一つとしている。本稿ではほとんど触れることができなかったが，クザーヌス研究に深い意義を求める際の伝統として，今や下火になりつつある近代・近世的思想の先駆者という視点の他に，協和主義者・平和主義者であるという視点から，クザーヌスの思索の中に宗教寛容の理想を探るということもなされている。とは言え，クザーヌスの思惟を宗教平和の頂点におくには，彼の平和主義的思惟の中枢には三位一体論・キリスト論が存在しているという困難があった（宗教多元主義者によってクザーヌスがほとんど言及されなかったことは，このことに起因しているとも考えられる）。しかしながら八巻はクザーヌスの思考構造そのものを取り出すことによって三位一体論・キリスト論なしの平和論を構築しうるものとなり，そのような意味でも八巻の研究は画期的であると言える。
- (51) Werner Beierwaltes, *Identität und Differenz* (Frankfurt am Main, Klostermann, 1980), *Denken des Einen: Studien zur neuplatonischen Philosophie und ihrer Wirkungsgeschichte* (Frankfurt am Main, Klostermann, 1985).
- (52) 佐藤直子「クザーヌスとプロクロス」（『新プラトン主義研究』第11号，2012年）など。なお，佐藤は神学の視点からの論考も出している。
- (53) Karl Jaspers, *Nikolaus Cusanus* (München, R. Piper, 1987), S. 63-64. 藪田坦訳『ニコラウス・クザーヌス』（理想社，1970年），88頁。
- (54) 八巻和彦「クザーヌスの神秘主義」竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世 III 神秘哲学』（岩波書店，2012年），265-267頁。
- (55) Bernard McGinn, *The Harvest of Mysticism in Medieval Germany* (the Presence of God Series Volume IV, New York, The Crossroad Publishing Company, 2005), p. 432.
- (56) *ibid.* p.469.
- (57) Stefan Schneider, *Die "kosmische" Grösse Christi als Ermöglichung seiner universalen Heilswirksamkeit: an Hand des kosmogenetischen Entwurfes Teilhard de Chardins und der Christologie des Nikolaus von Kues* (Münster, Aschendorff, 1979).

参考文献

一次文献

Nicolai de Cusa opera omnia iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis, ad codicum fidem edita (Hamburg, F. Meiner, 1932-).

Acta Cusana: Quellen zur Lebensgeschichte des Nikolaus von Kues im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Erich Meuten und Hermann Hallauer (Hamburg, F. Meiner, 1976-).

二次文献

伊藤博明責任編集『ルネサンス：世界と人間の再発見』中央公論新社，2007年

坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』岩波書店，1997年

佐藤直子「クザーヌスとプロクロス」(『新プラトン主義研究』第11号，2012年)

塩路憲一「クザーヌスにおける「個」の形而上学について」(渡邊二郎監修・哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』昭和堂，2000年)

島田勝巳「「推測」と〈否定神学〉」(『天理大学学報』第64巻2号，2013年)

藪田坦『クザーヌスと近世哲学』創文社，2003年

藪田坦『〈無限〉の思惟』創文社，1987年

松山康國『無底と悪』国際日本研究所，1972年

松山康國『風についての省察』春風社，2003年

八巻和彦「クザーヌスの神秘主義」(竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世Ⅲ 神秘哲学』岩波書店，2012年)

八巻和彦『クザーヌスの世界像』創文社，2001年

八巻和彦・矢内義顕編『境界に立つクザーヌス』知泉書館，2002年

渡邊守道『ニコラウス・クザーヌス』聖学院大学出版会，2000年

ニコラウス・クザーヌス著，八巻和彦訳『神を観ることについて』岩波書店，2001年

フラッシュ，クルト著，矢内義顕訳『ニコラウス・クザーヌスとその時代』知泉書館，2014年

モイテン，エーリヒ著，酒井修訳『ニコラウス・クザーヌス』法律文化社，1974年

リーゼンフーバー，クラウス著，村井則夫訳『中世思想史』平凡社，2003年

リベラ，アラン・ド著，阿部一智・永野潤・永野拓也訳『中世哲学史』新評論，1999年

Beierwaltes, Werner. *Identität und Differenz* (Frankfurt am Main, Klostermann, 1980).

Beierwaltes, Werner. *Denken des Einen: Studien zur neuplatonischen Philosophie und ihrer Wirkungsgeschichte* (Frankfurt am Main, Klostermann, 1985).

Blumenberg, Hans. *Aspekte der Epochenschwelle: Cusaner und Nolaner* (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1976). 村井則夫訳『時代転換の局面』法政大学出版局，2002年。

Cassirer, Ernst. Text und Anmerkungen bearbeitet von Tobias Berben, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der Neueren Zeit Erster Band* (Hamburg, F. Meiner, 1999). 須田朗・宮武昭・村岡晋一訳『認識問題 —近代の哲学と科学における— 1』みすず書房，2010年。

- Cassirer, Ernst. Text und Anmerkungen bearbeitet von Friederike Plaga und Claus Rosenkranz, *Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance: Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge* (Hamburg, F. Meiner, 2002). 藪田坦訳『個と宇宙 —ルネサンス精神史—』名古屋大学出版会, 1991年。
- Flasch, Kurt. *Nikolaus von Kues. Geschichte einer Entwicklung* (Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann GmbH, 1998).
- Ganoczy, Alexandre. *Der dreieinige Schöpfer: Trinitätstheologie und Synergie* (Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2001).
- Haubst, Rudolf. *Das Bild des Einen und Dreieinen Gottes in der Welt nach Nikolaus von Kues* (Trier, Paulinus-Verlag, 1952).
- Haubst, Rudolf. *Die Christologie des Nikolaus von Kues* (Freiburg im Breisgau, Herder, 1956).
- Hopkins, Jasper. "Nicholas of cusa (1401–1464): First Modern Philosopher?" in *Midwest Studies In Philosophy*, Vol. 26, 2002.
- Hopkins, Jasper. *Nicholas of Cusa's Dialectical Mysticism: Text, Translation, and Interpretive Study of De visione dei* (Minneapolis, A.J. Banning Press, 1985).
- Jaspers, Karl. *Nikolaus Cusanus* (München, R. Piper, 1987). 藪田坦訳『ニコラウス・クザーヌス』理想社, 1970年。
- Koch, Josef. *Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kues* (Köln, Westdeutscher Verlag, 1956).
- Koyré, Alexandre. *From the Closed World to the Infinite Universe* (Baltimore, Johns Hopkins Press, 1957). 野沢協訳『コスモスの崩壊 —閉ざされた世界から無限の宇宙へ—』白水社, 1999年。
- Mandrella, Isabelle. *Viva imago: Die praktische Philosophie des Nicolaus Cusanus* (Münster, Aschendorff, 2012).
- McGinn, Bernard. *The Harvest of Mysticism in Medieval Germany: Volume IV in the Presence of God Series* (New York, The Crossroad Publishing Company, 2005).
- Meier-Oeser, Stephan. *Die Präsenz des Vergessenen: zur Rezeption der Philosophie des Nicolaus Cusanus vom 15. bis zum 18. Jahrhundert* (Münster, Aschendorff, 1989).
- Nellivilathekkathil, Prasad Joseph. *Ineffabilis in the Thought of Nicolas of Cusa* (Münster, Aschendorff, 2010).
- Schneider, Stefan. *Die "kosmische" Grösse Christi als Ermöglichung seiner universalen Heilswirksamkeit: an Hand des kosmogenetischen Entwurfes Teilhard de Chardins und der Christologie des Nikolaus von Kues* (Münster, Aschendorff, 1979).
- Vansteenberghe, Edmond. *Le Cardinal Nicolas de Cues (1401-1464): L'action – la pensée* (Paris, Champion, 1920).
- Watanabe, Morimichi. *The Political Ideas of Nicholas of Cusa: with Special Reference to*

クザーヌス研究史に対する一考察
—思想史研究・一性研究に注目して—

his De concordantia catholica (Genève, Droz, 1963).

Watanabe, Morimichi. edited by Gerald Christianson, Thomas M. Izbicki, *Nicholas of Cusa:
A Companion to his Life and his Times* (Farnham, Surrey, Ashgate Pub., 2011).